

【僕】「マジかよ…本当に霊夢になってる…」

どきどき

ははは

ハードモードな人生に飽き始めていた僕が、
バーで出会ったのは怪しげなサラリーマンだった。
彼の、心のスキマを埋めるとかいう言葉に、
酔った僕は、本当にそんな事が出来るのであればと
博麗霊夢のような美少女にして、イーシューモードな
人生を送れるようにしてくれよ、と言ってやった。
彼は、それでは二週間だけ美少女の身体にして
あげましようと言いつつ、僕に一つの薬を手渡した。
僕はそれを飲み干し、帰宅して眠りに付き、
寝苦しさを覚え、夜中に目覚めたら、この有様だ。

【僕】「夢…じゃないよな…僕がこんな美少女に…」

薄暗い部屋の姿見に映る自分の身体は、本当に
博麗霊夢に瓜二つの美少女だった。
とにかく、僕は目の前にいる美少女の身体を、
性欲のままに弄びたい、そんな気持ちで一杯だった。

もし博麗霊夢になれたら

博麗霊夢の体で、生放送・オナニー・コスプレ・逆レイプ・獣姦・中出しを行う変態TSF作品!



女騎士の城

DOJIN
R18
成人向け

たろ
たろ

【僕】「それじゃ、まずは…」

僕はパンツを脱いで、その場に座り込み、両足を大きく広げて、割れ目を露出させた。姿見には、毛の生えていないピンクのスジが映し出されている。

【僕】「さ、これが女の子の…
霊夢のアソコなのか…」

童貞の僕が初めて生で見た女性器が自分の身体になるとは予想もしていなかった。まるで他人の身体を操って眺めているような、僕はそんな不思議な感覚に陥っていた。僕は本能に従い、男を知らないであろう割れ目に指を伸ばし、割れ目を閉じたり開いたりして、隅々まで観察していった。

どきどき

どきどき



【僕】「ひっ！？」 やばっ…気持ちいいっ…」

開いた割れ目の内側を指でなぞると、
思わず声が漏れてしまうほどの
強い刺激に襲われた。
男の身体でオナニした時とは、
全く別物の強い快樂。

【僕】「んっ…あひっ…」

自分の声とは思えないほど、可愛く色気のある
声を聞いていると、指が止まらなくなってしまう。
僕は夢中になって割れ目を隅々まで愛撫し、
クリトリスを転がし、女の身体で
生まれて初めての絶頂へと達した。



どっ

ぱんぱん

ぐちゃぐちゃ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

【僕】「ふう…気持ちよすぎた…」

女の身体つて、こんなに気持ちいいの…」

初めての女の身体での絶頂は強烈で、オナニーが
終わった後でも、しばらく身体の震えが止まらなかった。
僕は落ち着いた所で、イージーモードの人生を歩むため
女になった事を思い出し、自分の割れ目に目を向けた。

1788 1888

【僕】「そういうえば、今は動画配信で
金が稼げる時代だったよな…」

どきどき
どきどき

何も考えずオナニーしてしまっただが、考えてみれば、
こんなコスプレ美少女のオナニーシーンだ。
生放送したら、とんでもない金が稼げるはずだ。
この美少女の身体を、不特定多数に見せつける。
それを考えただけで、子宮の辺りが疼き出した。
僕は半ば興奮状態になりながら、配信の準備をした。



びん

びん

【僕】「これで大丈夫かな……？」

僕は見よう見まねで成人向け動画配信サイトに接続し、カメラとマイクを自分に向けて、配信をスタートした。

【視聴者】「何これ新しい放送？」

【視聴者】「うわ、何この子！」

「すげえ美少女じゃん！」

【視聴者】「なにこれ、霊夢のコス？」

「え？ マジで成人向け？」

配信と同時に、「コメント欄が」
「一気に沸き立っていく。」

はははは

ぐきゅぐきゅ

びん



ぐん

【僕】「博麗霊夢です。これからHな配信をしたいと思います。是非、チャンネル登録をよろしくおねがいますね」

僕がそう告げると、間違いではなく本当に成人向け放送である事を

確認した視聴者が、「斉に歓声のコメントを流していく。」

視聴者はたちまち数千人に達し、こんな大勢の前でHな放送をするのかと、僕は当初の目的である金儲けも忘れ、だんだんと興奮していった。

1988 1988

んん

♡♡♡

あぁ

んん

【視聴者】「で、Hな配信って、何をする気なのかな？」

視聴者からのコメントは、僕の次の行動の予想で埋まった。僕はおもむろにその場に座り、足を開いて、さつきオナニーしたばかりで程よくほぐされた、ピンク色の割れ目を指先でくばあと開いて見せつけた。

【僕】「さつきオナニーしたばかりの僕の割れ目、奥まで見えますか？」

ノットPCの画面には、美少女である博麗霊夢が、挑発的な笑みを浮かべ、ピンク色のキレイな割れ目を見せつけている。とても自分の体でやっているとは思えない。現実離れた光景が、僕を賛辞するコメントで埋め尽くされていく。気持ちはいい。僕は調子に乗っていく。

【視聴者】「もつと奥見せてよ！」

視聴者からのリクエストに、さらに割れ目を開いていく。僕は、何故か部屋に転がっていたクスコを手に取り、それをそつと割れ目へと挿入する。この身体の膣は痛みも無く柔らかかく開き、その子宮口をあらわにしていく。僕はさらに、内視鏡をスマホにつなぎ、その奥の小さな穴、子宮口に挿入し、子宮内部まで見せつけてやった。

【僕】「奥…これで見えますか？」

どきどき

ははは



【視聴者】
【視聴者】
【視聴者】

「うっわ…子宮丸見えじゃん」
「奥つて、ここまで見せるか？」
「変態過ぎるだろこの子！」

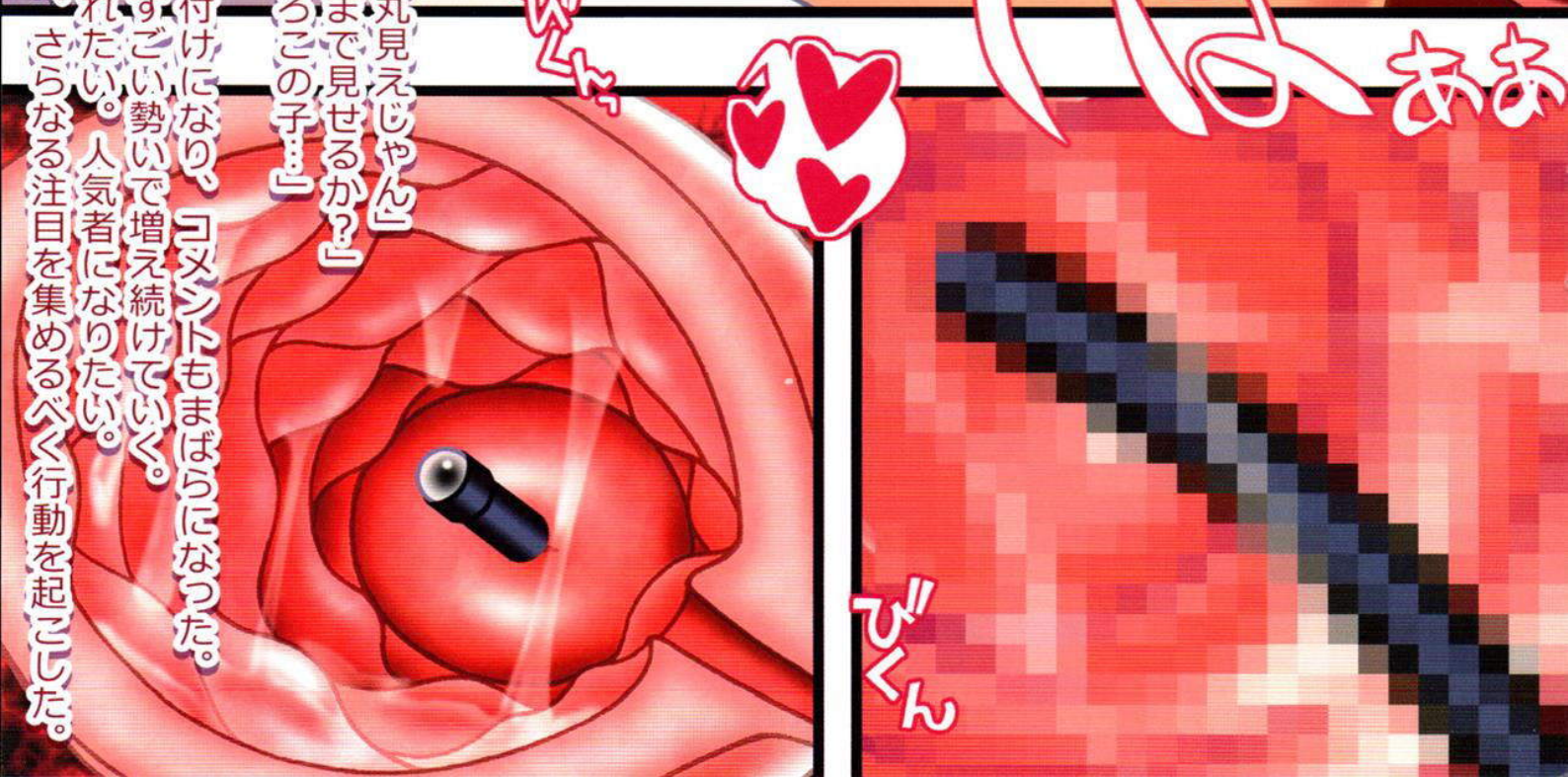
視聴者は僕の子宮画像に釘付けになり、「コメントもまばらになった。しかし、アクセス数はものすごい勢いで増え続けていく。気持ちいい。もつと注目されたい。人気者になりたい。見られる快樂を覚えた僕は、さらなる注目を集めるべく行動を起こした。

んん



はあ

んん



翌日。

僕はとある学校教室風に作られた撮影スタジオにやってきた。

どきどき

そこには僕以外にも、数名の男達が集まっていた。

僕は昨日の配信の後、オフパコ生放送をしようと、その相手を募集したのだ。

勿論タダではない。オークション形式で上位数名までという制限つきだ。

価格は面白いほどに盛り上がり、たった三晩のオークションで、

男だった僕が1年かけて稼げる額に達してしまった。

やはり美少女は凄い、イージーモードだ。

チキチキ

【僕】今日は来て頂いてありがとうございますっ♡

【男】今日は女子学生風の制服姿なんだね。めちゃくちゃ似合ってるよ

【男】へへっ！ 霊夢ちゃんとオフパコ撮影会ができるなんて！ 楽しみで眠れなかったよ

【男】高い金払うんだ、しっかり楽しませてもらうぜ。生中出して良かったんだよね？

男達は一人ずつ、札束を僕の前へと積んでいく。

見たことも無い大金と、欲望にギラついた男達の目と、カチカチに勃起したペニスと、それらを全て映し出すカメラ。

これで興奮するなという方が無理筋だ。僕の割れ目は愛撫する必要も無く濡れていた。



びく

びく

【僕】「それでは、博麗霊夢のコスプレオフパコ生放送を開始したいと思います♡」

私はそう告げて、オークションで最も高い値を付けた男に歩み寄った。でっぷりと太った中年男は、服を脱ぎ横たわり、僕の上に乗りと指示を出す。まるで逆レイプだ。こんな美少女が、こんな醜い中年を逆レイプし、それを放送するのだ。僕の興奮は最高潮に達した。愛液を滴らせながら、僕は中年男にまたがった。

【僕】「ひぐっ…… ああああああつっ♡♡♡♡」

男の身体では考えられない事だが、女の身体と脳になっているからか、それとも自分の身体という実感が無いからか、ペニスをすんなり受け入れた。気持ちいい。男のペニスつて、こんなに気持ちよかったのか。女の身体つてこんなに気持ちいいのか。こんなのずるい。僕は夢中になって腰を上下に動かし、男のペニスをしごく。男の反応も無視し、男が射精しても無視し、ひたすら男のペニスから快楽を引き出すために、逆レイプのように男を犯していった。

1488 1888

ぐきゅん、ぐきゅん、

エロエロ♡♡♡♡

ぐきゅん、ぐきゅん、

ぐきゅん

ぐきゅん



たろ ぽん

【僕】 「あつ…♡ はあつ…はあつ…♡」

僕は子宮に中出しされ絶頂しながらも、一人目の男の精液を根こそぎ搾り取ってやった。この身体は凄い、体力が無尽蔵にわいてくる。どれだけ絶頂しても射精されても全然足りない。

【僕】 「それでは次の方、どうぞ♡♡」

僕はカメラに尻を向け、次の男を誘う。男は飢えた野獣のように僕に襲いかかり、ガチガチに勃起したペニスを、何の遠慮もなくぶちこむ。

【僕】 「あひっ！ あつ…子宮♡♡」

昨日の内視鏡放送で子宮口を少し開いていたためか、男のペニスは僕の子宮の中にまで食い込んで、最深部に直接精液を流し込んでいった。

ズキキ
ズキキ

アハハハハ
アハハハハ

ムズ

ズキキ
ズキキ

ズキキ



【僕】「今日はこの子と交尾してみたいと思いますっ♡」
【視聴者】「おいおい…本気か？ それ野良犬でしょ？」
【視聴者】「こんな美少女の獣姦物とか、最高すぎる…」



すっかりペニスと射精と注目の虜になってしまった僕は、人間の男では飽き足らず、動物にまで手を出してしまった。僕は公園へと向かい、サカサのついた犬を相手に足を開くと、犬は勃起したペニスを僕の割れ目に何の遠慮もなく突き立ててきた。

【僕】「ひゅっ…♡ あっ…♡」
【視聴者】「おい、ホントに入ってるぞ…」
【視聴者】「獣姦なんて初めて見た…」
【視聴者】「エロ過ぎる、抜ける…」

「はっはっはっ」
「はっはっはっ」
「はっはっはっ」
「はっはっはっ」

人間の物ではないペニスが、美少女の、自分の割れ目に突き刺さっている。獣臭い毛むくじやらの塊が、目の前で快樂を貪るためだけに腰をへこへこ動かしている。人間とは違い、野生の動物による、荒々しさと無尽蔵の体力による強引な突き上げ。僕はカメラが見ている事も忘れ、その異形のペニスに夢中になっていた。

「はっはっはっ」
「はっはっはっ」
「はっはっはっ」
「はっはっはっ」



【僕】「せ、精液が出始めました…♡」

ついに犬は、私の中で精液を吐き出す。しかし様子がおかしい。

射精したら収まるはずの勃起が、ますます固くなっていく。

いや、むしろ根本が膨らんで、

僕の膣をギチギチに広げ始めている。

射精が止まる様子もない。

【僕】「あっ…な、なにこれっ…」

中でどんどん大きく…ああああっ♡♡♡」

犬の球形根で出入り口を塞がれ、逃げ場を無くした大量の精液がどんどん子宮に溜まっていく。

下腹部の圧迫感がどんどん強さを増していき、

犬のペニスと僕の膣のスキマを無理やりこじあげ、

精液が外へと溢れ出し、垂れ落ちていく。

子宮をパンパンにされながら、僕は犬を両足で抱え込んで締め上げ、絶頂していた。

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん…

んんん

んんん

【僕】「…さて、次は何をしようかな？」

たまはな

どきどき

獣姦を堪能した僕は、自宅に戻り水着に着替える。
この身体なら何をやっても気持ちがいいし、
何をやっても注目され人気を集めるし、それが大金になる。

【僕】「もうずっとこの身体のままでもいいよな…」

僕が思わずそう呟いた時、唐突に僕の部屋の中に、
僕を霊夢にする薬を渡したサラリーマンが現れた。

【サラリーマン】「あーあ、その言葉を言っってしまったね…
残念ですが、貴方は二度と元の身体に
戻ることは出来ません。ドーンー」

【僕】「ひっ…？ な、何を言っ…ぎゃあああ…っっっっっ！」

一瞬の衝撃の後、僕は倒れ、記憶がどんどん薄れていく。
僕は…いや、私は…。何をしていたんだっけ？
元の身体って、何の話だっけ？

どきどき

